第 135 回医療ビジネス研究会のご案内

2018 年のノーベル生理学・医学賞は京都大学特別教授の本庶佑氏と米テキサス大のアリソン（James P. Allison）教授が受賞されました。対象となった両氏の研究は癌の免疫療法ですが、第 4 の癌治療として俄かに脚光を浴びています。日本では癌の「標準治療」は外科治療（手術）、放射線治療、化学療法（抗がん剤治療）の 3 つが基本とされ、それ以外の治療に関しては一般的ではなく、医師や医療機関によっては標準治療以外の治療を希望すると、癌治療そのものを拒否されることも少なくありません。

癌は加齢と共に増加する病ですので、日本を筆頭に欧米の先進国におきましても人口の高齢化に伴い癌患者が増えています。米国では癌患者の増加が財政を圧迫するとの懸念から、1970 年代にフォード大統領の政権下にて栄養問題特別委員会を設置し、国民の栄養と病気の関係を徹底的に調査してきた歴史があります。それらの結果を基に FDA(アメリカ食品医薬品局)や米国国立がん研究所（NCI）が、健康のための数値目標を設定するなど、癌予防に効果があると言われる食べ物の作用の研究を進めてきました。

1990 年代には NCI が 2 千万ドル（約 24 億円）の予算で、野菜や果物のフィトケミカル(植物化学)成分の機能性を研究するデザイナーフーズ計画をスタートさせ、また官民一体となり”5 A DAY“運動（1日5サービングの野菜や果物を摂取）を展開しました。その結果、ブロッコリーに含まれるスルフォラファンの解毒酵素誘導、大豆イソフラボンのホルモン分泌調整、ヘンプ油に含まれるオメガ3系脂肪酸の消炎作用など、毎日の食卓にのぼる食材の機能性が次々に明かになり、東洋に伝わる「医食同源」という考え方が科学的事実として証明される事となりました。

日本おきましては引続きがん患者数に加え、がんで亡くなる人も増加していますが、米国では国をあげての食生活改善運動の影響か、野菜の消費量は年々増加し癌患者は減少傾向にあります。わが国もこうした流れをうけて、2015 年に生鮮食品を含めた機能性表示食品制度がスタートしました。今回はメディカルハーブ研究の第 1 人者であるグリーンフラスコの林氏をお招きし、野菜や果物、ハーブの機能性や食生活での効果的な活用法について解説戴きます。

新薬、高度・先端医療だけでは健康社会は創れません。生命活動の基本を理解し、日々の食生活を科学的に修正する事(予防行動)が、個人にとっても社会にとっても重要になってくるようです。老若男女、健康状態にかかわらず、是非とも多くの皆様にお聞き戴きたくご案内申上げます。

2018 年 10 月

特定非営利活動法人 医療事業再生機構

記

- テーマ:『野菜や果物の健康効果とエビデンス』 =驚きの発見現場から=
- 講　師:林　真一郎　氏　薬剤師、臨床検査技師、グリーンフラスコ株式会社代表、特定非営利活動法人日本メディカルハーブ協会副理事長、日本アロマセラピー学会薬剤師部会長、東邦大学薬学部客員講師、静岡県立大学大学院非常勤講師、日本赤十字看護大学大学院非常勤講師
- 開催日時:2018 年 11 月 8 日（木曜日）18:30～20:30

以上

※ 医療ビジネス研究会への参加には受講票が必要です。参加を希望される方は弊会 HP よりお申込みください。